

歴史研究の如き地味な學問に於ては、かくして得られた成績についても、他の直接吾々の日常生活に觸れた諸種の學問の上に於ける發明の如く、世の反響を生ずることは極めて少いが、然もその研究の徑路に於ける努力と、人間の微妙の精神の働きとに至つては、畢竟彼此同一である。然もその對象とする所が、複雑を極めた人間の働きを、時とか處とかいふ縦横上下の線で幾重にも因果つけた面倒至極な事象であるだけに、單なる理窟で進み得る研究と異り、注意と判斷と諸種の知識を要する點とに於て、到底他の想像も及ばぬ苦心を伴ふ。

歴史研究の根本に横はるものはいふ迄もなく史料である。研究の難易も一つには史料の有無多少に比例する。さて中央亞細亞に關してそれ自身の提供する史料は從來極めて少く、かく稱し得るものは僅に支那や西方諸國の史乘に記載せらるる斷片的の記事に過ぎなかつた。従つて此の地方の歴史は殆んど全く不明であつたと言つてもよい。

試に支那の史籍に記さるゝ所によつて、此の地方の過去を尋ねて見るがよい。果してどれ丈けの史的觀念を吾々の頭の中に形成することが出来るだらうか。然るにも拘らず、此の地方は古來東西文明交渉の上に極めて重要な地位を占めて居るもので、西より東し、東より西する文明の潮は、主として此の地を流れたものである。従つて此の種の問題を研究するに當つて、此の地方の歴史を不明としたままで目的を達しようとするのは、例へば水道の水口に這ひ出す蚯蚓に驚いて、水源の掃除に懸命の勞を用ひるが如きである。されば中央亞細亞の歴史研究なることは、

それ自身の不明を究明すると共に、また隣接諸國の歴史の研究の爲に、必要缺く可らざるものであるといふ理由から、漸次人の注意を惹くに至つた。此の地方のことを比較的詳しく書いた彼の玄奘三藏の旅行記なる「大唐西域記」や、「慈恩寺三藏傳」、その他これに類した書物が非常な注意を拂はれ、その研究者の續出するに至つたこと